望月之、滿有面輪二、如花、咲而立有者、○略下

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕寄レ物陳レ思

十五日、出之月乃、高高爾、君乎座而、何物乎加將念、

〔萬葉集十三挽歌〕往向、年緒長、仕來、君之御門乎、如天、仰而見乍、雖畏、思憑而、何時可聞、日足座而、十五月之、多田波思家武登、○略下

〔古今和歌六帖一歲時〕十五夜

難波潟鹽みちくれば山のはに出る月さへみちにけるかな

〔運歩色葉集伊〕十六夜月

〔撮壤集上天像〕月　不レ知夜月

〔和爾雅一天文〕十六夜月　既望十六日也　哉生魂十六日也

〔八雲御抄三上天象〕月○略中　いざよひの月は十六日月也云々、是源氏歌故也、但万葉には不知夜歴月と書り、凡上旬月は不レ可レ謂、雖レ非レ十六日、十七八日月詠有レ何難哉、但故人說皆十六日也、尤可レ然、○略中

いざよふ月はいざよひの月にあらざるか、万十七、山のはにいざよふ月をいでんかとまちつゝをるによぞふけにける、是非十六日の月なり、

〔日本釋名一時節〕既望　十六夜の月也、いざよふは、やすらふ意也、日くれて少やすらひ出る也、

〔倭訓栞中編二伊〕いさよひ　十六夜をいふといへり、月の少しやすらひて出るをもて、よひを宵にかよはしいふ也、

〔十六夜日記〕身をえうなきものになしはて、ゆくりもなくいざよふ月にさそはれいでなんとぞおもひなりぬる、○略中

ゆくりなくあくがれ出しいざよひの月やおくれぬかたみなるべき、都を出しことは、神無月

十六夜月